

2017. 12. 14 (木)

## 私の望みはあなたにあります

岡田 弥生

御覧ください、与えられたこの生涯は僅か、手の幅ほどのもの。御前には、この人生も無に等しいのです。ああ、人は確かに立っているようでもすべて空しいもの。

ああ、人はただ影のように移ろうもの。ああ、人は空しくあくせくしだれの手に渡るとも知らずに積み上げる。

主よ、それなら何に望みをかけたらよいのでしょうか。わたしはあなたを待ち望みます。

(詩編 39 編 6-8 節)

### はじめに

おはようございます。クリスマスツリーがきれいですね。ご存知かと思いますが、これは先々週の金曜日にグルーベル先生、カバリ先生が中心となり、カバリ先生の英語のクラスの学生さん、そして別のクラスの2名の学生さんたちが時間を割いて飾り付けをしてくださったのです。

### キリストは光

光はいいものですね。光を目にすると心が溶かされるようです。クリスマスに一番ふさわしいのが光だと思います。なぜなら前期にパワーポイントでイエス様の自己紹介をご紹介しましたが、その中であつたように、ヨハネによる福音書で、イエス様は「私は世の光」だと言っておられますし、イエスに従うものは「命の光を持つ」とも言っておられま

す。

### 2002年留学先イギリスでのクリスマス

私はクリスマスの光に接するたびに2002年関学から留学させていただいたイギリス・ケンブリッジでのクリスマスのことを思い出します。イギリスでは緯度が高いので夏は夜の8時過ぎまで日中のように光があり、活動時間が長いのですが、10月初めくらいからどっと昼の時間が短くなります。11月を過ぎると朝10時くらいでもどんよりとして薄暗く、夕方も3時過ぎくらいにはもう暗くなります。おまけにいつも雨がしょぼしょぼ降り出し、夕方図書館から自転車で帰るとき、何でいつもこんなものだろうと切なく、涙が出る思いがしました。私は学位論文に朝から晩まで集中していましたから、そう気は滅入りませんでした

が、何もすることがなければ winter blue といって精神的にまいってしまうようです。

そんな状態ですからイギリスでは人々はクリスマスを早くから待ち望んでいます。10月をはじめくらいからもうクリスマスカードが店頭に並び、クリスマス当日は普段教会に行かない人でも教会に行き、光であるキリストを讃えます。私はひとり暮らしでしたから、「寂しいでしょう」と、通っていた教会員の方が何人も家に招待してくださいました。薄暗い一日でしたが、クリスマスの光は心の緊張をすべてとるような温かさや優しさをもって輝いていました。

実はその3か月前に、私は予想もしなかった辛い出来事にイギリスで遭遇したのです。それは恩師三宅晶子先生の死でした。私はもともと大学の先生になどなろうとは思っていませんでした。こうして大学の教員になれたのはひとえにその三宅先生のお導きというほかないのです。先生は文字通り学問に命を捧げたような方でしたから、とても厳しく、学生たちは何とか先生の授業を取らずに卒業する方法はないかと考えたものでした。私自身は大学に入ってこれといって集中するものがなかったので先生の情熱あふれる授業には大変魅力を感じていました。でも夏休みもリポートで何冊もの本を読むなど、とても余裕のない学生生活であったと思います。先生は当然私が大学院に進むと思っておられたようですが、私自身は生意気にも、「もう十分勉強した。今度はそれを社会に還元する時」と決めこんで、大学を卒業すると大阪女学院の中学校の教師となり、それこそ学生時代よりも楽しく生徒たちと過ごしました。でもときどき三宅先生から電話がありました。「ドイツ語を今でも続けていますか？」と聞

かれ、忙しくてそれどころではないなどとは言えず、「はい」と弱弱しく応えていました。ある時には「今は楽しいでしょうが、将来きっと行き詰まるのでその時に備えて勉強しておきなさい」などと予告めいたことを言われました。

中学1年生から3年生まで担任させていただき、その生徒たちを高校へ進学させて退職、結婚しました。結婚しても一緒に翻訳をするなど先生との関わりは途絶えませんでした。どうして私などにそこまで目をかけてくださったのか今でも不思議でなりません。結婚して3年目くらいでしょうか。大学院に博士課程ができたのでこの際大学に戻って来なさいと強引に勧められました。確信はもてませんでしたが、子供もいませんでしたので、おっかなびっくりで大学院に通い始めました。大学院では先生は本当に厳しく接してくださいました。あまりの厳しさにくじけそうにもなりましたが、何とか乗り越え、おかげでこうして皆様の前に立ってお話をする機会が与えられているのです。

三宅先生はケンブリッジ大学のクレアホール (Clare Hall) という大学院のフェロー[特別研究員]であられ、毎年のようにケンブリッジを訪れておられました。2001年には糖尿病と診断され、医者から渡英は控えるように言われていました。しかし私が関学からケンブリッジ大学に留学しているというので、医者の許可を得て、2002年8月に2ヶ月の予定でケンブリッジにやって来られました。72歳でした。大学図書館をスニーカーで走り回ってひたむきに研究されていました。今から思いますと先生は人生を総括するようなことをいろいろおっしゃっていました。「文学の才能が与えられていることに気

付いて、ひたむきに走ってきたけれど、私は時に弱い人に対する思いやりがなかったかもしれない] などとも言っておられました。そして9月半ばに帰国を控えておみやげ物などを買うためにロンドンに（ケンブリッジからロンドンまでは列車で約1時間余りです）お一人で出かけられ、ケンジントン近くのホテルに滞在されました。その間、私は先生のお勧めで私の研究対象であるウィリアム・フォークナー（William Faulkner, 1897-1962）という南部作家の先祖の地であるスコットランドに、1泊2日で滞在しました。そこでスコットランドの人たちの気さくさに感激したりしていました。そして帰宅して、翌日は（ケンブリッジ大学図書館が整理のため数日閉館であったので）先生と列車で2時間くらいかけてオックスフォードの大学図書館に行く予定で、先生が滞在されているカレッジの部屋にモーニングコールをすることになっておりました。

ところが電話をすれども、すれども何の応答もなく、不安に思っていた矢先でした。日本にいる夫から電話がありました。「しっかりしてよ、三宅先生がロンドンのホテルで亡くなっておられると大使館を通して連絡があった」と、眼の前が真っ白になりました。

いろいろな経緯があり、話せば長くなるのですが、日本大使館の方、お名前を覚えていますが、先生の所持品の中に私のフラットの電話番号があったというので電話をくださいました。「お心細いでしょう。いつでも電話をください」と携帯の番号まで教えてくださいました。ご親切なお言葉は忘れることができません。それからご遺族を日本より招き、予想もしなかった悲しい経験をいたしました。駆け付けられたご親族は（時間的制約が

あったので無理もなかったかもしれませんが）先生が滞在されていた大学のフラットに入るや否や、先生があれだけ大事にされていた洋服などをすべて大きなゴミ袋に一括して捨てられました。私は身を切られる思いがいたしました。

滞在先のホテルで食事をされて気分が悪くなったということでしたが、検死の結果は自然死で事件性はないとのことでした。ご遺族は先生のご遺体をそのまま日本に持ち帰って日本で葬儀をしたいと言われました。ロンドンの日本大使館に一緒に出向きましたところ、それは要人でもなければとても費用が掛かって無理なことであること、第一ご遺体が傷ついてしまつてとてもお勧めできないとのことでした。係りの方が丁寧に説明されている時、これまで私は朝に晩にずっと電話対応などで緊張続きで泣くこともできなかったのですが、この時は客観的になることができ、「何て悲しい話をしているのだろう」とはじめて涙を流しました。

実は夫の両親もかつて父が大学教員をしていたおり一年間イギリス留学をしており、友人が多いためその夏も恩師が来られる時と前後して私の留学先に来てくれました。そのことを知った恩師はおっしゃいました。「でもご両親がご無事に帰国されて何よりよかったわね。こんなところでお二人に万一のことがあったらどんなにあなたが大変か」と、そうっておられた先生が亡くなられてこんなに辛い思いをおさせになって」と嘆かざるをえませんでした。結局ご遺族も納得していただきロンドンで火葬してご遺骨をお持ち帰りになることになりました。でもどうやってお葬式をすればいいのかと途方にくれました。

しかし神様はちゃんと備えてくださり、商

用で北欧におられた同じ教会の方がロンドンに来てくださり、いっしょになってロンドンの葬儀屋さんを探してくださいました。インターネットで探した覚えはなく、歩いてあちこち、ご遺族が滞在されている間に葬儀をしてくれるところを探したのです。そして先生のご葬儀を、花に囲まれたウェストミンスター近くの小さな教会で、執り行いました。

思えば、メールで励ましてくださったグルーベル先生や打樋先生、日本にいる教会の方々、友人など多くの方々に支えられました。友人は「先生が一番好きなイギリスの地で娘のように思っていた岡田さんのそばで亡くなられて幸せだった」と言ってくださいました。私も「先生の人生は見事に全うされた」と信じて辛い経験を忍びました。でも先生がもしケンブリッジの地で私の目の前でお倒れになられたのでしたら私はとても立ち直れなかったと思います。しかしロンドンでひっそりとおひとりで亡くなられたのは、神様の深いご配慮であったと思われてなりません。

先生の死から3カ月たった2002年のクリスマスの光はそのような出来事がすべて一度に思い出され、大変切ない光りでありましたが、どんな状況でもこの光である神様が導いてくださることを確信する時でもありました。今もあの一連の出来事を思う時、なんとも言えない思いで胸がいっぱいになります。

My hope is in thee.

さて今日読んでいただいた聖書の箇所は今の私の心境にぴったりの箇所です。8節の「わたしはあなたを待ち望みます」は手持ち

の英語の聖書RSV (Revised Standard Version) では My hope is in thee と訳されています。この箇所を読んでいて私は最近自分の問題と言いますか、自分の闇の部分にのみ目を注いでいたことにハッとさせられました。年が寄って、体力やいろいろと衰えていく自分の現状など、あれこれあれこれ考えると本当に心が重く、しんどくなってしまふことが多くなりました。しかし、My hope is in thee です。希望は夢とは違います。キリスト教における希望は神に根ざすものであり、その独り子イエス・キリストに根拠づけられています。そしてコリントの信徒への手紙Ⅰの13章13節にありますように、最も確かなものとして、信仰と愛とともに根本的な祝福として示されています。すなわち聖書が勧めているのは辛い現状にあって、ただ気休め的にぼんやり神様の助けを夢見しているというのではなく、いっしょに生きて働いてくださる神様を信じて祈り、御心に適うことのために光に自らを差し出すという生き方そのものだと思います。

クリスマスを迎えるに当たって、自分の闇にのみ目を留めるのではなく、あの激動の一年を乗り越えさせてくださった神、生も死もすべてを支配されている神様の光に照らされて、気落ちせず歩み続けたいと思います。

祈り

神様、世の光としてイエス様をこの世にお与えくださいました恵みに感謝いたします。私たちは、自分の弱さや、自分の問題にのみ目を注ぎ、あなたの光を忘れてしまう愚かなものでしかありませんが、「私の望みはあなたにあります」と、光に照らされた歩みをす

ることができますようにお導き下さい。世界には、また私たちの周りにも本当に様々な問題を抱えて苦しんでいる方々がおられます。私たちが少しでもその方々にあなたの光を分け与えることができますように導いてくださ

い。

ご降誕を待ち望むイエス・キリストのお名前によってお祈りいたします。アーメン

(社会学部教授)